島根大学教育学部紀要（教育科学）第14巻　59～70頁　昭和55年12月

両親の家庭内リーダーシップと幼児の行動特性の関係

深田　博己*・利島　保**・中邑　賢龍**

Hiromi FUKADA, Tamotsu TOSHIMA and Kenryu NAKAMURA

Relationship between Parents' Leadership at Home and Infants' Behavioral Characteristics

Abstract : This study was conducted to examine the potential effect of parents' leadership behavior toward infants at home on their infants' behavioral performance in kindergarten. The PM pattern leadership of parents was measured by their self-perception ; and the behavioral performance of infants was rated by the classroom teacher.

The following results were obtained. Infants' behavioral performance was negatively correlated with fathers' P function and positively with mothers' P function, but the performance showed very weak positive correlation with fathers' M function and very weak negative correlation with mothers' M function.

It was suggested that infants' behavioral performance would be facilitated in the case of father with small P function and mother with large P function, but would be suppressed in the case of father with large P function and mother with small P function.

問　　題

親子関係の研究において，子どもに対する親の養育態度・行動は，①親の自己認知，②子どもによる認知，あるいは③第三者による認知に基づいて測定される。

親の養育態度・行動についてのわが国における因子分析的研究は，ほぼ共通した因子の存在を示唆している。たとえば，①石黒・藤原（1954）は，親の自己認知に基づいて，〝愛情〟と〝強制〟の2因子を，②古川ら（1969）は，子どもの認知に基づいて，〝しつけ・訓練〟と〝情緒的相互作用〟の2因子を，③小嶋（1970）は，親の自己認知と子どもによる認知に基づいて，〝心理的統制〟，〝ゆるい統制〟，〝受容―拒否〟の3因子を，④古川（1972）も，親の自己認知と子どもの認知に基づいて，〝しつけ・訓練〟と〝情緒的相互作用〟の2因子を抽出した。

これらの因子は，三隅（1964）のPM式リーダーシップ論における Performance Factor と Maintenance Factor に対応すると考えられる。実際，古川ら（1969）や古川（1972，1974）は，〝しつけ・訓練〟の因子を Performance Factor，〝情緒的相互作用〟の因子を Maintenance Factor と解釈している。

PM式リーダーシップ論では，リーダーシップ機能として，目標達成機能（Performance Function）と集団維持機能（Maintenance Function）を考え，このP機能とM機能の組み合わせによって，①P機能もM機能も強いPM型，②P機能が強く，M機能の弱いP型，③M機能が強く，P機能の弱いM型，④P機能，M機能ともに弱い pm 型，の4種類のリーダーシップ類型を設定し，分析の際に使用することが多い。

親の養育態度・行動を，PM理論の立場からリーダーシップ行動として捉えた研究には，上述の古川ら（1969），古川（1972，1974）に加えて，三隅・阿久根（1971）がある。

古川ら（1969）は，親のリーダーシップ行動が，子どもの将来・学習・友人関係などの項目を含む〝しつけ・訓練〟の因子と，子どもの世話や感情的支持などの項目を含む〝情緒的相互作用〟の因子から構成されることを発見し，これらの因子をP因子，M因子と命名した。

この研究を受けて，古川（1972）は，親のリーダーシ

* 島根大学教育学部幼年期教育研究室
** 広島大学教育学部心理学研究室

ップ行動に関して，親自身と子どもの両方に共通して使用できる，P要因，M要因それぞれ10項目ずつから成るテスト・バッテリーを開発した。そして，親の自己認知と子どもの親認知との比較では，父親のP機能，M機能，母親のP機能において，親の自己認知得点の方が高いこと，また，親に対する子どものポジティブな態度は，親の自己認知ではPM型とP型に，子どもの親認知ではPM型とM型により強く関係していることを見い出した。

さらに，古川（1974）は，幼稚園児から高校生までを対象に，両親のリーダーシップ行動に対する認知を，現実像と理想像の両方について調査した。その結果，発達とともに子どもは，親のリーダーシップ行動に関する理想と現実との間のずれを認知するようになると報告している。そして，このずれは，父親に対して〝情緒的相互作用〟の増加を，母親に対して〝しつけ・訓練〟の減少を理想像として望むことから生ずると解釈している。

また，三隅・阿久根（1971）は，小学校4・5年生を対象に，子どもの認知に基づいて決定された両親のPM式リーダーシップ類型と学業成績，テスト不安，適応性との間の関係を研究した。その結果，①学業成績に関しては，over achiever の場合，父親，母親ともPM型とM型が多く，under achiever の場合，父親，母親ともP型，pm 型が多く，②子どものテスト不安が大きかったのは，父親の場合も，母親の場合もP型と pm 型のときに多く，③P型と pm 型の父親，母親の場合に子どもはより不適応な傾向を示した。

一方，親のリーダーシップではないが，佐藤・篠原（1976）は，学級担任のPM式リーダーシップ類型が小学校4～6年生の学級雰囲気および学級意識に及ぼす効果を数量化理論第Ⅱ類によって分析している。外的基準である学級雰囲気と学級意識に及ぼす予測因としてのP機能とM機能の潜在的影響度を検討し，M機能の規定力が強く，強度の強いM機能に強度の強いP機能の結合したPM類型では潜在的影響力が一層大きくなる，と述べている。

上述の諸研究から，子どもに対する両親の養育態度・行動を，リーダーシップ行動として，P機能とM機能の2次元的に捉えることは妥当であると判断できる。しかしながら，親のリーダーシップ行動が子どもの態度・行動に及ぼす潜在的影響度を検討した研究は少ない。特に，幼児期における親のリーダーシップ行動と子どもの態度・行動との間の関係を明らかにした研究はあまり見当たらない。そこで，本研究では，幼児の態度・行動として，幼稚園における保育目標達成行動を取り上げ，この達成行動と親のリーダーシップ機能（P機能とM機能）との関係を究明することを目的とする。

ところで，三隅・阿久根（1971）は，父親と母親のリーダーシップを並列的に扱い，それぞれのリーダーシップ類型と子どもの特性との間の関係を別々に分析している。しかし，両親の家庭内リーダーシップは，父親のリーダーシップと母親のリーダーシップを独立的に扱うだけでは不十分であり，両者のリーダーシップを総合的に捉える必要があろう。その方法としては，第1に，父親のリーダーシップと母親のリーダーシップを単純加算したものが両親のリーダーシップであると仮定し，父親のP得点と母親のP得点の和を両親のP機能の強度，父親のM得点と母親のM得点の和を両親のM機能の強度とする方法が考えられる。そして，こうして得られた両親のリーダーシップ類型と幼児の行動との関係を分析するやり方である。ところが，この方法は，幼児期における父親と母親のリーダーシップ機能の独自性や相補性を無視する方法であるという欠点をもつ。そこで，第2に，手続きも解釈も非常に複雑になるけれども，父親のリーダーシップ類型と母親のリーダーシップ類型の組み合わせによって16類型から成る両親のリーダーシップ類型を設定し，これらの類型と幼児の行動との関係を検討する方法が考えられる。以後の両親という記述は，すべて，父親と母親の両者を総合的に取り扱う場合を意味する。

本研究では，幼児の達成行動に関して，父親のリーダーシップと母親のリーダーシップによる並行的分析のほかに，上述した2通りの方法に基づいて得られた両親のリーダーシップによる分析も加えて，幼児の達成行動に及ぼす親のリーダーシップ機能の潜在的影響度を推論したい。

方　　法

1．調査の概要と調査対象

幼児の行動特性として，幼稚園における子どもの保育目標達成度について担任教師に評定を求め，両親に対するPM式リーダーシップ調査を実施した。

調査対象は，呉市内のS幼稚園の園児132名であり，教師による行動評定は全員について得られた。

ところが，両親に対するリーダーシップ調査は，回収率88.6%であり，回収票は117票であった。この117票のうち，回答不備5票と両親以外の回答2票を除去した110票が有効回収票となり，データ分析の対象となった。

分析の対象となった幼児は，年少児22名，年中児42名，年長児46名であり，男女別内訳は，それぞれ，年少

児で6名，16名，年中児で25名，17名，年長児で21名，25名であった。平均年齢は，年少児4歳7カ月，年中児5歳6カ月，年長児6歳6カ月であった。

2. 幼児の行動特性の評定

幼児の行動特性として，幼稚園における保育6領域（健康，社会，自然，言語，音楽リズム，絵画製作）での保育目標達成度を，学級担任教師が評定した。評定段階は，①指導のねらいを達成している（3点），②おおむね指導のねらいを達成している（2点），③指導のねらいからみて特に指導を要する（1点）の3段階であり，次に示す6領域，合計22項目にわたって評定が行われた。

(1) 健康領域
1. 健康の習慣や態度を身につける
2. 運動に興味をもち進んで行う
3. 安全の習慣や態度を身につける

(2) 社会領域
4. 個人生活の習慣や態度を身につける
5. 社会生活の習慣や態度を身につける
6. 社会の事象に興味や関心をもつ

(3) 自然領域
7. 動植物を愛護し，自然に親しむ
8. 自然の事象などに興味や関心をもつ
9. 日常生活に適応する技術を身につける
10. 数量・図形などに興味や関心をもつ

(4) 言語領域
11. 人の話を聞いてわかる
12. 自分の思うことや経験を話す
13. 日常生活のことばを正しく使う
14. 絵本や紙しばいなどに親しむ

(5) 音楽リズム領域
15. 喜んで歌ったり楽器をひいたりする
16. 動きのリズムを楽しむ
17. 音楽に親しみ喜んで聞く
18. 感じや考えを音や動きに表現する

(6) 絵画製作領域
19. のびのびと絵を書いたりものを作ったりする
20. 感じや考えをくふうして表現する
21. いろいろな材料や用具を使う
22. 美しいものに興味や関心をもつ

この評定は，1979年3月に実施され，前述の幼児の平均年齢はこの時期を基準に算出した。

3. 両親のリーダーシップ調査

親のリーダーシップを測定するために，「親のしつけ調査」というタイトルの調査票を作成し，父親と母親の両方に対して同一の調査を行なった。調査手続きは，幼稚園で子どもに調査票を配布し，家庭に持ち帰らせて記入を依頼し，再び園で回収した。

調査用紙には，リーダーシップ測定用の12項目の質問とその他の5項目の質問が含まれていた。リーダーシップ測定尺度は，古川（1972）の質問項目から，次のP次元6項目，M次元6項目を修正・採用し，5段階で回答を求めた。

(1) P次元
1. 早く寝なさいなどと時間を守るようにいう
2. 自分のことは自分でするようにいう
3. 家の中であばれたり，さわいだりしないようにいう
4. 礼儀やきまりをきちんと守るようにいう
5. 悪いことをしたときしかる
6. おもちゃ等の後片づけをするようにいう

(2) M次元
1. 子どもの味方になる
2. 良いことをしたり，作ったものがよいとほめる
3. 子どもの心配事の相談相手になる
4. 子どもに気軽にかせいを求められる
5. 子どもと一緒にあそんだり外出したりする
6. 風邪など病気のとき優しくする

各項目とも，リーダーシップ機能の最も強い段階の回答から最も弱い段階までの回答に対して5点から1点の得点を与え，P次元6項目の得点の和をP得点，M次元6項目の得点の和をM得点とした。

結果と考察

1. 幼児の保育目標達成行動の構造

(1) 保育目標達成行動項目間の内部相関関係

幼児の保育目標達成度の評定得点を利用して，22項目の行動特性間の相関関係を算出したのが表1である。表1によれば，各行動特性間には全体的に正の相関関係がみられるが，6領域を構成するそれぞれの下位項目間に特に強い正の相関関係が存在するわけではないことがわかる。つまり，理念的に保育6領域として位置づけられている6種類の行動領域は，目標達成度という視点から分析した限りでは，領域としてのまとまりを持たないこ

表1　幼児の保育目標達成行動項目間の内部相関関係（N＝110）

項目	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22
1	1.000																					
2	.382	1.000																				
3	.701	.335	1.000																			
4	.507	.180	.530	1.000																		
5	.494	.301	.585	.721	1.000																	
6	.384	.205	.469	.458	.539	1.000																
7	.528	.473	.525	.441	.411	.412	1.000															
8	.415	.476	.500	.414	.444	.461	.765	1.000														
9	.529	.333	.580	.774	.826	.496	.501	.478	1.000													
10	.406	.311	.372	.417	.332	.468	.365	.314	.422	1.000												
11	.271	.174	.285	.270	.332	.475	.184	.259	.356	.340	1.000											
12	.198	.183	.172	.187	.290	.451	.243	.381	.300	.290	.450	1.000										
13	.211	.224	.282	.370	.387	.527	.444	.544	.454	.430	.398	.519	1.000									
14	.206	.174	.233	.333	.281	.329	.272	.187	.289	.359	.189	.337	.208	1.000								
15	.247	.229	.339	.415	.388	.305	.265	.299	.455	.411	.306	.297	.304	.274	1.000							
16	.296	.332	.375	.517	.528	.405	.243	.313	.592	.253	.271	.244	.287	.240	.610	1.000						
17	.233	.197	.335	.474	.457	.281	.122	.282	.466	.190	.317	.302	.271	.186	.439	.652	1.000					
18	.325	.344	.405	.447	.537	.212	.169	.255	.495	.185	.339	.124	.168	−.044	.357	.538	.648	1.000				
19	.306	.160	.265	.471	.438	.333	.316	.344	.456	.564	.248	.340	.413	.492	.398	.303	.290	.210	1.000			
20	.377	.236	.399	.554	.575	.484	.352	.434	.643	.271	.382	.407	.376	.295	.358	.489	.432	.538	.554	1.000		
21	.485	.265	.499	.612	.688	.586	.477	.470	.663	.452	.412	.414	.474	.343	.405	.489	.386	.501	.633	.762	1.000	
22	.551	.228	.539	.667	.620	.426	.505	.464	.656	.440	.245	.293	.381	.408	.456	.441	.300	.352	.576	.619	.639	1.000

注1）表内の数値はピアソンの相関係数 r

とが示されたことになる。

(2)　保育目標達成行動の因子構造

上で述べたことは，評定得点による22項目の行動特性の因子分析の結果からも指摘される。表2はバリマックス法による直交回転後の因子行列である。抽出された因子の命名は敢えて行なわないが，得られた因子構造がいわゆる保育6領域とは全く異なる構造を示していることは明白である。

因子構造の理解も困難であるので，以後，達成行動については，理念的構造にしたがって保育領域ごとの分析と項目別分析を進める。

2.　両親の家庭内リーダーシップの構造

(1)　P機能とM機能の関係

本研究で使用したP尺度とM尺度は，独立性が保証されたものであるが（古川，1972），この点を確認するために，①父親のP得点とM得点，②母親のP得点とM得点，の相関関係を各々算出した。その結果，P得点とM得点の間の相関関係は，①父親では $\gamma=.166$, $P<.05$, ②母親では $\gamma=.234$, $P<.01$ であり，正の相関関係が存在することが見い出された。しかしながら，相関係数が0.3以下と小さいので，以後のデータ処理において，親のリーダーシップをP機能とM機能の2次元から分析することは一応差しつかえないと思われる。

(2)　父親と母親のリーダーシップ機能の強さの比較

次にリーダーシップ機能の強さに，父親と母親の違いがみられるかどうかを検討する。父親のP得点は $\bar{X}=21.70$, $SD=3.09$, 母親のP得点は $\bar{X}=22.28$, $SD=2.73$ であり，P機能に関しては父親と母親のリーダーシップ強度に差はない。ところが，M機能に関しては，父親のM得点が $\bar{X}=22.37$, $SD=3.33$, 母親のM得点が $\bar{X}=23.49$, $SD=2.39$ であり，両者の間に有意差（$t=2.756$, $df=109$, $P<.01$）がみられる。つまり，母親のM機能が父親のそれよりも大きいといえる。

(3)　父親と母親のリーダーシップの関係

最後に父親のリーダーシップと母親のリーダーシップはどのような関係にあるのかを検討する。父親のP得点と母親のP得点との間には $\gamma=.204$, $P<.05$, 父親のM得点と母親のM得点との間には $\gamma=.069$, n. s., の相関関係が得られた。つまり，P機能に関しては，父親と母親の間に若干の正の相関関係がみられるが，M機能に関してはみられない。

また，父親のP得点と母親のM得点との間には $\gamma=.221$, $P<.01$, 父親のM得点と母親のP得点との間には $\gamma=.075$, n. s., の相関関係が見い出された。すなわち，父親のP機能と母親のM機能との間には弱いけれども正の相関関係が存在し，父親のP機能が強い場合，母親のM機能も強い傾向が読み取れる。しかし，父親のM機能と母親のP機能との間にはこのような関係は見い出されなかった。

3.　親のリーダーシップ機能と幼児の達成行動との相関関係

表2　幼児の保育目標達成行動に関する直交回転後の因子行列

項目＼因子	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	共通性
1. 健康の習慣や態度を身につける	.497	.502	.100	.043	.158	.537
2. 運動に興味をもち進んで行なう	.055	.548	.247	.103	.061	.379
3. 安全の習慣や態度を身につける	.513	.515	.199	.078	.112	.588
4. 個人生活の習慣や態度を身につける	.659	.216	.310	.097	.322	.691
5. 社会生活の習慣や態度を身につける	.697	.232	.333	.228	.159	.729
6. 社会の事象に興味や関心をもつ	.345	.253	.110	.538	.219	.534
7. 動植物を愛護し，自然に親しむ	.269	.788	−.043	.196	.204	.777
8. 自然の事象などに興味や関心をもつ	.208	.688	.101	.386	.109	.689
9. 日常生活に適応する技術を身につける	.657	.301	.361	.217	.238	.758
10. 数量・図形などに興味や関心をもつ	.187	.278	.101	.259	.503	.443
11. 人の話を聞いてわかる	.179	.086	.231	.525	.081	.375
12. 自分の思うことや経験を話す	.028	.103	.127	.680	.235	.546
13. 日常生活のことばを正しく使う	.142	.284	.086	.619	.233	.546
14. 絵本や紙しばいなどに親しむ	.134	.091	.036	.179	.573	.388
15. 喜んで歌ったり楽器をひいたりする	.105	.179	.525	.152	.420	.518
16. 動きのリズムを楽しむ	.241	.171	.734	.135	.222	.696
17. 音楽に親しみ喜んで聞く	.219	.048	.727	.219	.068	.633
18. 感じや考えを音や動きに表現する	.431	.120	.674	.122	−.165	.698
19. のびのびと絵をかいたりものを作ったりする	.334	.049	.113	.276	.657	.636
20. 感じや考えをくふうして表現する	.569	.078	.306	.399	.212	.629
21. いろいろな材料や用具を使う	.624	.168	.227	.434	.307	.753
22. 美しいものに興味や関心をもつ	.587	.280	.167	.130	.473	.692
因子分散	3.677	2.544	2.543	2.368	2.077	13.212
寄与率	16.71	11.56	11.56	10.76	9.44	60.03

ここでは，親のリーダーシップにおけるP機能とM機能が，それぞれ幼児の達成行動にどのようなかかわりを有するかについて，相関分析によって検討する。

親のリーダーシップとして，①父親のP得点，②父親のM得点，③母親のP得点，④母親のM得点，さらに家庭内の両親のリーダーシップを加算的に考えて，⑤両親のP得点（父親と母親のP得点の和），⑥両親のM得点（父親と母親のM得点の和）の6種類の指標を用いる。親のリーダーシップを示すこれら6個の変数と幼児の達成行動の評定得点との間の相関関係を整理したのが表3である。

表3によれば，幼児の達成行動と父親のP機能との間には負の相関関係が，母親のP機能との間には正の相関関係がみられる。父親のP機能との間に有意な負の相関関係が存在しているのは，項目5，16，17，領域2，3，5および全体である。一方，母親のP機能との間に有意な正の相関関係が存在するのは，項目1，3，7，8，12，領域1，3，4であり，行動全体でもわずかながら正の相関関係（$r=.154$, $P<.06$）がみられる。

しかし，父親のM機能，母親のM機能，両親のP機能，あるいは両親のM機能と幼児の達成行動との間には何の関係も見い出せなかった。

以上のように，P機能の強い父親の場合，幼児の保育目標達成行動が劣り，P機能の強い母親の場合，逆に幼児の達成行動が優れていることが明らかになった。

このように，父親のP機能と母親のP機能が幼児の達成行動に対してまったく相反する影響を及ぼすことが証明されたので，父親と母親のリーダーシップから単純加算的に両親のリーダーシップを決定する方法は適切でないことになる。この問題については，リーダーシップ類型を用いた次の分析のところで再検討する。

表3　親のリーダーシップと幼児の達成行動の相関関係

リーダーシップ／行動	父親		母親		両親	
	P機能	M機能	P機能	M機能	P機能	M機能
項目 1	−.036	−.008	.211*	.127	.091	.066
2	−.118	.011	.096	−.118	.020	−.068
3	−.098	−.084	.184*	.127	.036	.010
4	−.133	.059	.085	.050	−.045	.069
5	−.164*	−.013	.017	−.099	−.103	−.073
6	−.134	.120	.095	−.024	−.037	.076
7	−.134	−.055	.260**	.077	.055	.001
8	−.107	−.023	.230**	.013	.058	−.011
9	−.157	.070	.112	−.011	−.044	.041
10	−.106	.121	.156	−.106	.019	.027
11	−.137	.066	.034	−.025	−.042	.032
12	−.067	.115	.218*	.045	.079	.114
13	−.156	.061	.132	−.077	−.027	.000
14	−.082	−.005	.089	−.027	−.015	−.023
15	−.116	.132	.057	−.062	−.050	.057
16	−.247**	.066	−.141	−.035	−.258**	.023
17	−.188*	.178*	−.023	−.016	−.141	.126
18	−.105	.084	.016	−.087	−.054	.008
19	−.041	−.010	.151	−.054	.056	−.045
20	−.052	.110	.149	.022	.053	.092
21	−.147	.123	.113	−.006	−.031	.086
22	−.051	−.023	.031	.098	−.029	.038
領域 1	−.104	−.033	.204*	.056	.062	.004
2	−.170*	.057	.073	−.030	−.075	.021
3	−.166*	.057	.228**	−.023	.017	.025
4	−.154	.082	.161*	−.027	−.003	.044
5	−.199*	.140	−.024	−.065	−.150	.063
6	−.087	.062	.136	.010	.017	.048
全体	−.178*	.079	.154	−.018	−.029	.044

注1）* P＜.05，　** P＜.01　；表内の数値はピアスンの相関係数 r

4. 親のリーダーシップ類型と幼児の達成行動との関係

(1)　リーダーシップ類型の決定方法と分析方法

前節ではP機能とM機能を並行的に扱ったが，ここでは両機能を同時に取り上げ，親のリーダーシップをP機能とM機能の組み合わせによって2次元的に捉える。つまり，P機能の大小とM機能の大小の組み合わせから，PM型，P型，M型，pm 型の4類型のリーダーシップを設定する。

父親，母親および両親のP得点とM得点を幼児の学年別に示したのが表4である。表4によると，母親のP得点において年中児と年長児の間に有意差（t=2.568, df=86, P<.05）がみられ，両親のP得点でも年中児と年長児の間に同様の有意差（t=2.099, df=86, P<.05）がみられる。このため，P得点とM得点の各々について，親を高得点群（H群）と低得点群（L群）に分類する共通基準を設定することが不可能であるので，各学年

表4　幼児の学年別にみた親のリーダーシップ得点

	P　得　点			M　得　点		
	年少児	年中児	年長児	年少児	年中児	年長児
父　親	21.59 (3.21)	21.54 (2.64)	21.89 (3.48)	21.40 (4.04)	22.31 (3.57)	22.89 (2.66)
母　親	21.77 (2.46)	21.64 (2.27)	23.10 (3.08)	23.00 (2.20)	23.16 (2.60)	24.02 (2.24)
両　親	43.36 (4.56)	43.21 (3.33)	45.21 (5.21)	44.90 (3.90)	45.52 (4.06)	46.67 (3.98)

注1）表内の数値は$\bar{X}$，（SD）
注2）年少児N＝22，年中児N＝42，年長児N＝46

ごとに平均値を基準として，平均値より大きい得点を示す親をH群，平均値以下の得点を示す親をL群とした。こうして，学年ごとの基準にしたがって，P得点とM得点のH，Lの組み合わせからPM型，P型，M型，pm型の4類型を決定した。各類型に分類された人数は，①父親の場合，PM型36人，P型16人，M型30人，pm型28人，②母親の場合，PM型28人，P型22人，M型21人，pm型39人，③両親の場合，PM型34人，P型19人，M型27人，pm型30人となった。

親のリーダーシップを独立変数的に扱い，幼児の達成行動を従属変数的に扱うことによって，親のリーダーシップがこどもの保育目標達成行動に及ぼす影響を推論してみたい。具体的な分析手続きとしては，P機能とM機能を，高低2水準から成るP要因，M要因と考え，幼児の達成行動に関して，これらP要因とM要因の2元配置に基づく分散分析（2×2）を行う。また，親のリーダーシップ類型による幼児の達成行動の違いを直接的に検討するために，達成行動について，2類型間の比較をt検定を利用して行う。

父親・母親のリーダーシップ類型ごとに，幼児の保育目標達成行動の評定得点（$\bar{X}$ と SD）を，項目別・領域別に示したのが表5，表6であり，これらの表に基づく2元配置の分散分析の結果および2類型間のt検定による比較結果を示したのが表7，表8である。なお，両親についての分析結果は，後述する理由によって省略した。

(2)　父親のリーダーシップ類型と幼児の達成行動との関係

表5と表7より，父親の場合は，2要因の分散分析の結果，項目2，15，16，17，領域5でP要因の主効果がみられ，いずれもP機能の弱い方（L群）が子どもの達成行動の優れていることが示される。なお，M要因の主効果，P要因とM要因の相互作用効果はまったくみられない。

また，子どもの行動を2類型間で比較したところ，①項目5，7，13，16，領域5，全体でpm型の方がPM型よりも，②項目15，16，領域5でpm型の方がP型よりも，③項目15，16，17，領域5でM型の方がP型よりも，④項目16，領域5でM型の方がPM型よりも，幼児の達成行動は優れていた。つまり，父親のリーダーシップはpm型かM型の場合の方が，PM型やP型の場合よりも，幼児の達成行動の水準が高かった。

(3)　母親のリーダーシップ類型と幼児の達成行動との関係

表6と表8より，母親の場合，2要因の分散分析の結果，項目10，19でP要因の主効果，項目2，10，18でM要因の主効果，項目17でP要因とM要因の相互作用効果が発見された。これらの項目では，母親のP機能の強い方（H群）が，あるいはM機能の弱い方（L群）が，幼児の達成行動が優れている。

そして，幼児の達成行動を2類型間で比較した結果，①項目2，10でP型の方がPM型よりも，②項目10，19でP型の方がM型より，③項目7，10でP型の方がpm型よりも，④項目18でpm型の方がPM型よりも，⑤項目18でpm型の方がM型よりも，子どもの達成行動が良かった。つまり，母親のリーダーシップは，P型のに場合，他の型に比べて，幼児の達成行動の水準が高かった。

(4)　まとめ

以上のように，幼児の達成行動に及ぼす父親と母親のリーダーシップの効果は質的にまったく異なることが明らかとなった。つまり，子どもの幼稚園における保育目標達成行動を促進すると推定されるリーダーシップ類型

表5　父親のリーダーシップ類型別にみた幼児の達成行動

行動＼リーダーシップ	PM型 (N＝36)	P　型 (N＝16)	M　型 (N＝30)	pm型 (N＝28)
項目 1	2.19 (0.40)	2.25 (0.43)	2.23 (0.42)	2.25 (0.51)
2	1.97 (0.44)	2.00 (0.35)	2.17 (0.37)	2.18 (0.47)
3	2.08 (0.36)	2.19 (0.53)	2.10 (0.30)	2.25 (0.51)
4	2.14 (0.54)	2.12 (0.86)	2.23 (0.50)	2.39 (0.44)
5	1.97 (0.64)	2.12 (0.70)	2.10 (0.54)	2.32 (0.60)
6	2.00 (0.24)	2.06 (0.66)	2.13 (0.50)	2.04 (0.50)
7	2.08 (0.28)	2,12 (0.33)	2.20 (0.40)	2.29 (0.45)
8	2.06 (0.23)	2.06 (0.24)	2.13 (0.34)	2.18 (0.38)
9	2.08 (0.60)	2.12 (0.70)	2.23 (0.50)	2.36 (0.55)
10	2.08 (0.49)	1.94 (0.66)	2.07 (0.57)	2.14 (0.58)
11	2.14 (0.42)	2.19 (0.53)	2.33 (0.54)	2.25 (0.43)
12	1.97 (0.29)	2.00 (0.61)	2.13 (0.43)	2.04 (0.42)
13	1.94 (0.23)	1.94 (0.43)	2.03 (0.48)	2.11 (0.31)
14	2.22 (0.42)	2.31 (0.46)	2.30 (0.46)	2.25 (0.43)
15	2.00 (0.47)	1.88 (0.33)	2.20 (0.48)	2.21 (0.49)
16	1.89 (0.31)	1.88 (0.33)	2.17 (0.45)	2.18 (0.47)
17	1.89 (0.31)	1.81 (0.39)	2.03 (0.31)	2.04 (0.42)
18	1.75 (0.43)	1.75 (0.43)	1.90 (0.40)	1.89 (0.56)
19	2.11 (0.57)	2.31 (0.58)	2.10 (0.60)	2.25 (0.57)
20	1.97 (0.55)	2.00 (0.61)	2.10 (0.54)	2.00 (0.38)
21	1.92 (0.55)	1.94 (0.66)	2.03 (0.55)	2.04 (0.57)
22	2.19 (0.40)	2.25 (0.43)	2.27 (0.44)	2.32 (0.47)
領域 1	6.25 (0.89)	6.44 (0.86)	6.50 (0.92)	6.68 (1.34)
2	6.11 (1.17)	6.31 (1.96)	6.47 (1.36)	6.75 (1.35)
3	8.31 (1.13)	8.25 (1.48)	8.63 (1.45)	8.96 (1.59)
4	8.28 (0.90)	8.44 (1.46)	8.80 (1.45)	8.64 (1.11)
5	7.53 (1.14)	7.31 (1.36)	8.30 (1.24)	8.32 (1.60)
6	8.19 (1.78)	8.50 (2.03)	8.50 (1.89)	8.61 (1.54)
全　体	44.67 (5.47)	45.25 (7.82)	47.20 (6.71)	47.96 (7.30)

注1）表内の数値は$\bar{x}$，（SD）

表6　母親のリーダーシップ類型別にみた幼児の達成行動

行動＼リーダーシップ	PM型 (N＝28)	P　型 (N＝22)	M　型 (N＝21)	pm型 (N＝39)
項目 1	2.29 (0.45)	2.27 (0.45)	2.19 (0.50)	2.18 (0.38)
2	1.96 (0.42)	2.23 (0.42)	2.00 (0.44)	2.13 (0.40)
3	2.21 (0.41)	2.23 (0.52)	2.10 (0.29)	2.08 (0.42)
4	2.25 (0.51)	2.23 (0.67)	2.14 (0.71)	2.26 (0.49)
5	2.04 (0.63)	2.18 (0.72)	1.95 (0.65)	2.23 (0.53)
6	2.00 (0.38)	2.23 (0.52)	2.00 (0.53)	2.03 (0.42)
7	2.18 (0.38)	2.32 (0.47)	2.19 (0.39)	2.08 (0.27)
8	2.11 (0.31)	2.18 (0.39)	2.10 (0.29)	2.08 (0.27)
9	2.18 (0.54)	2.27 (0.62)	2.05 (0.65)	2.26 (0.54)
10	2.04 (0.42)	2.36 (0.57)	1.90 (0.61)	2.03 (0.58)
11	2.21 (0.41)	2.27 (0.45)	2.05 (0.58)	2.31 (0.46)
12	2.18 (0.38)	1.95 (0.47)	1.95 (0.49)	2.03 (0.36)
13	2.04 (0.33)	2.09 (0.29)	1.90 (0.53)	2.00 (0.32)
14	2.25 (0.43)	2.32 (0.47)	2.19 (0.39)	2.28 (0.45)
15	2.11 (0.41)	2.18 (0.49)	1.90 (0.43)	2.13 (0.52)
16	1.93 (0.46)	2.00 (0.43)	2.05 (0.37)	2.13 (0.40)
17	1.96 (0.33)	1.86 (0.34)	1.86 (0.35)	2.05 (0.39)
18	1.71 (0.45)	1.82 (0.39)	1.71 (0.45)	1.97 (0.48)
19	2.25 (0.63)	2.36 (0.57)	1.95 (0.49)	2.13 (0.56)
20	2.04 (0.57)	2.05 (0.56)	1.90 (0.53)	2.05 (0.45)
21	1.93 (0.59)	2.09 (0.60)	1.90 (0.53)	2.00 (0.55)
22	2.25 (0.43)	2.27 (0.45)	2.29 (0.45)	2.23 (0.42)
領域 1	6.46 (1.09)	6.73 (1.14)	6.29 (1.03)	6.38 (0.92)
2	6.29 (1.28)	6.64 (1.72)	6.10 (1.51)	6.51 (1.26)
3	8.50 (1.30)	9.14 (1.66)	8.24 (1.38)	8.44 (1.30)
4	8.68 (1.23)	8.64 (0.98)	8.10 (1.51)	8.62 (1.12)
5	7.71 (1.28)	7.86 (1.32)	7.52 (1.10)	8.28 (1.57)
6	8.46 (1.92)	8.77 (1.88)	8.05 (1.59)	8.41 (1.74)
全　体	46.11 (6.57)	47.77 (7.22)	44.29 (6.34)	46.64 (6.75)

注1）表内の数値は$\bar{x}$，（SD）

表7　幼児の達成行動に関する父親のリーダーシップ類型関比較

比較条件	分散分析（2×2）			2条件間比較（t検定）					
	主効果		相互作用効果	df=50	df=64	df=62	df=42	df=56	df=44
	P要因	M要因							
行動	H：L	H：L	(P×M)	PM：P	PM：M	PM：pm	P：pm	M：pm	P：M
項目1									
2	<*								
3									
4									
5						<*			
6									
7						<*			
8									
9									
10									
11									
12									
13						<*			
14									
15	<**						<*		<*
16	<***				<**	<**	<*		<*
17	<*								<*
18									
19									
20									
21									
22									
領域1									
2									
3									
4									
5	<**				<*	<*	<*		<*
6									
全体						<*			

注1）表内の不等号は，比較条件の欄の最下段に示した2群間での差の方向を表わす。
注2）＊P＜.05，＊＊P＜.01，＊＊＊P＜.001。

は，父親の場合，pm 型かM型であるが，母親の場合，P型である。このように，母親のリーダーシップにおけるP機能は幼児の達成行動に対して積極的な役割を果たしているが，父親のリーダーシップは消極的な役割しか果しておらず，強いていえばM機能がいくらかポジティヴに働くといえる程度である。

父親と母親のリーダーシップ機能が質的に異なることが明らかになった以上，父親と母親のリーダーシップを単純加算して両親のリーダーシップを決定する方法は不適切であると結論せざるをえない。

5．両親のリーダーシップ16類型と幼児の達成行動との関係

表8　幼児の達成行動に関する母親のリーダーシップ類型間比較

比較条件	分散分析（2×2）			2条件間比較（t検定）					
	主効果		相互作用効果	df＝48	df＝47	df＝65	df＝59	df＝58	df＝41
	P要因	M要因							
行動	H：L	H：L	(P×M)	PM：P	PM：M	PM：pm	P：pm	M：pm	P：M
項目1									
2		<*		<*					
3									
4									
5									
6									
7							>*		
8									
9									
10	>*	<*		<*			>*		>*
11									
12									
13									
14									
15									
16									
17			*						
18		<*				<*		<*	
19	>*								>*
20									
21									
22									
領域1									
2									
3									
4									
5									
6									
全体									

注1）表内の不等号は，比較条件の欄の最下段で示した2群間での差の方向を表わす。
注2）＊P＜.05，＊＊P＜.01，＊＊＊P＜.001

父親のリーダーシップ類型と母親のリーダーシップ類型の組み合わせによって得られた16類型の両親のリーダーシップと幼児の達成行動との関係を分析する。各類型別に，幼児の達成行動の全体得点の平均値，標準偏差および人数を示したのが表9である。

各類型の人数が少ないので断定はできないが，幼児の達成行動が優れているのは，①父親がM型で母親がP型の場合，②父親がM型で母親がPM型の場合であり，達成行動が劣っているのは，③父親がPM型で母親がM型の場合，④父親がP型で母親がM型の場合であると思われる。すなわち，ⓐ父親のP機能が弱くてM機能が強く，かつ母親のP機能が強い場合に，幼児の保育目標達成行の水準は最も高く，ⓑ母親のP機能が弱くてM機能が強く，かつ父親のP機能が強い場合に，幼児の達成行動の

表9　両親のリーダーシップ類型別にみた幼児の達成行動

		母親 PM	母親 P	母親 M	母親 pm	計
父親	PM	44.81 (5.15) 16	44.40 (7.92) 5	40.60 (3.58) 5	46.60 (5.34) 10	44.67 (5.55) 36
	P	46.00 (0.0) 2	46.80 (9.04) 5	42.67 (12.42) 3	45.00 (7.87) 6	45.25 (8.08) 16
	M	49.80 (12.03) 5	51.80 (7.26) 5	45.38 (4.10) 8	45.42 (4.64) 12	47.20 (6.82) 30
	pm	46.60 (5.81) 5	48.00 (5.97) 7	47.20 (7.73) 5	48.91 (9.39) 11	47.96 (7.43) 28
計		46.11 (6.69) 28	47.77 (7.39) 22	44.29 (6.50) 21	46.64 (6.83) 39	46.28 (6.85) 110

注1）表内の数値は，上から$\bar{X}$，SD，N

表10　幼児の達成行動に関する両親のリーダーシップ条件間の比較

リーダーシップ／行動領域	母親(PM, P)×父親(M) (N=10)	父親(PM, P)×母親(M) (N=8)	比較 (t検定) (df=16)
1. 健康	7.10 (1.36)	5.88 (0.37)	t = 2.324 P<.05
2. 社会	6.80 (2.11)	5.50 (1.83)	n.s.
3. 自然	9.70 (1.99)	7.75 (1.69)	t = 2.081 P<.10
4. 言語	9.40 (1.81)	7.63 (2.08)	t = 1.818 P<.10
5. 音楽リズム	8.50 (1.34)	7.13 (1.54)	t = 1.901 P<.10
6. 絵画製作	9.30 (2.63)	7.50 (2.39)	n.s.
全体	50.80 (9.99)	41.38 (8.16)	t = 2.034 P<.10

注1）表内の数値は$\bar{X}$，（SD）

水準は最も低い。

上述の㋐と㋑のリーダーシップ条件における幼児の達成行動得点の平均値と標準偏差，および㋐㋑両条件間のt検定による行動の比較結果を表10に示した。表10から，達成行動全体では両条件間に傾向差（P<.10）がみられ，領域1では有意差（P<.05）が，領域3，4，5では傾向差（P<.10）がみられ，それほど明瞭でないけれど，上で述べた方向での一貫した差の存在することが証明された。

全体的考察と結論

従来の研究では，親のリーダーシップとして，父親のリーダーシップと母親のリーダーシップとが個々独立的・並行的に取り扱われてきたが，本研究では，父親と母親のリーダーシップを同時的・総合的に捉える，いわゆる両親のリーダーシップという視点を新しく取り入れた。両親のリーダーシップは，①父親と母親のリーダーシップの単純加算，②父親と母親のリーダーシップ類型の組み合わせ，によって決定した。そして，幼児の保育目標達成行動に及ぼす①父親，②母親，③両親のリーダーシップの影響を推論するために，PM式リーダーシップ論の立場に立って，次の3つの角度から分析を進めた。

第1に，①父親のP機能，②父親のM機能，③母親のP機能，④母親のM機能，⑤両親のP機能，⑥両親のM機能，の各々と幼児の達成行動との相関関係を求めたところ，父親のP機能との間には負の相関関係が，母親のP機能との間には正の相関関係が得られた。すなわち，父親の場合は，P機能が強くなると幼児の達成行動が抑制されるが，母親の場合は，P機能が強いほど幼児の達成行動は促進されるということが示唆された。

第2に，幼児の達成行動について父親あるいは母親のPM式リーダーシップ類型間で比較したところ，①父親のリーダーシップはpm型あるいはM型のときの方が，P型やPM型のときよりも，また②母親のリーダーシップはP型のときの方が，PM型やM型やpm型のときよりも，幼児の達成行動が優れていることが示された。

以上の第1と第2の分析から，父親と母親のP機能・M機能は，幼児の達成行動に対してまったく異質の効果を有することが実証された。したがって，父親と母親のリーダーシップを単純加算的に考えて両親のリーダーシップを決定する方法は不適切であるといえる。

そこで，第3に，父親と母親のリーダーシップ類型を

組み合わせて両親のリーダーシップ16類型をつくり，これらの類型間で幼児の達成行動を比較した。その結果，幼児の達成行動の水準は，①父親がM型で母親がP型かPM型の場合に最も高く，②父親がPM型かP型で母親がM型の場合に最も低いことが示された。すなわち，P機能が弱くてM機能の強い父親とP機能の強い母親の組み合わせの場合に，幼児の達成行動が最も優れており，P機能の強い父親とP機能が弱くてM機能の強い母親の組み合わせの場合に，幼児の達成行動が最も劣っていた。ただし，1類型あたりの人数が少いため，この傾向を断定的に認めることはできない。

本研究の限界として，①親のリーダーシップの測定が親の自己認知に基づいていること，②幼児の性差による親のリーダーシップの違いを考慮しなかったこと，③幼児の行動が，幼稚園における保育目標達成行動という特殊な行動であったこと，④家庭での親のリーダーシップ行動と幼稚園での幼児の行動を関係づけることにやや無理があること，を指摘することができる。これらの限界が存在することを踏まえた上で，本研究の分析結果をまとめると次のようにいえるであろう。

幼児の達成行動に対して，親のP機能は非常に大きく関係しており，父親のP機能は強いネガティヴな影響を，母親のP機能は強いポジティヴな影響をもつと推論される。ところが，M機能は幼児の達成行動に対してそれほど関係がなく，強いて言えば，父親のM機能は弱いポジティヴな影響を，母親のM機能は弱いネガティヴな影響を及ぼすということになろう。それゆえ，幼児の達成行動が最も優れているのは，父親のP機能が弱くて母親のP機能が強い場合であり，達成行動が最も劣るのは，父親のP機能が強くて母親のP機能が弱い場合であると考えられる。しかしながら，幼児の保育目標達成行動に対する父親と母親のリーダーシップの潜在的影響度が質的に全く異なることについての説明は，後続の研究に待たねばならない。

なお，今後の研究課題としては，本研究の限界として指摘した4つの問題点について検討することと，本研究で得られた結果の解釈の問題に関連するが，父親と母親のリーダーシップ機能の相互関係をさらに詳細に検討することがあげられる。

引用文献

古川綾子　1972　親の自己認知と子どもの認知による子どもに対する両親のリーダーシップ行動測定について　実験社会心理学研究，12，41－52.

古川綾子　1974　両親のリーダーシップ行動認知に関する発達心理学的研究――子どもからみた理想像と現実像の変化について――　教育心理学研究，22，69－79.

古川綾子・三隅二不二・篠原弘章　1969　親のPM式リーダーシップ測定(1)　日本心理学会第33回大会発表論文集，294.

石黒大義・藤原喜悦　1954　溺愛・放任・専制　児童心理，8，3，38－47.

小嶋秀夫　1970　親の行動インヴェントリー（P. B. I.）の検討　金沢大学教育学部紀要，19，129－144.

三隅二不二　1964　教育と産業におけるリーダーシップの構造―機能に関する研究　教育心理学年報，4，83－106.

三隅二不二・阿久根求　1971　両親の指導性が児童の学業成績，テスト不安と適応性に及ぼす効果　教育社会心理学研究，10，157－168.

佐藤静一・篠原弘章　1976　学級担任教師のPM式指導類型が学級意識及び学級雰囲気に及ぼす効果――数量化理論第Ⅱ類による検討――　教育心理学研究，24，235－246.